

ネットビジネスで1億円稼いで 自由になった元皿洗いの物語

目次

「はじめに」	3
「僕の人生から就職が消えた」	7
「月収 200 万円の憂鬱」	13
「起業に興味のない起業家」	16
「燃え上がる家、没落の父」	18
「麗しき労働の日々」	23
「地獄のような労働との遭遇」	27
「労働、この恐るべきもの」	32
「システムの隅っこにあいた風穴」	38

「はじめに」

僕が大学生だった頃、父と母が突如としてパチンコに狂った。

夫婦が長年溜めた財産は泡のごとく消えて、
家には猛烈な借金督促の嵐が吹いた。

親戚から借りたお金も合わせると、借金はゆうに 1000 万円を超えていた。

電気やガスが頻繁に止まった。
裁判所から財産差し押さえ通告が届いた。
家がなくなると母がよく泣いた。

大学生だった僕は学費と借金の利息を払うために、
毎日アルバイトに明け暮れた。

ファミレス、100円ショップ、水産工場、レンタルビデオ店、
カラオケなど、色々やった。

田舎だったので時給700円前後が相場だった。

ファミレスの皿洗いはとりわけ過酷だった。

夢も、趣味も、勉強も、遊びも、恋愛も、すべてが二の次だった。
ただ黙々と単純労働をして、稼いだ金を親の借金返済にあてた。
親を捨てるほど非情にもなりきれなかった。

物質的な贅沢をしたいなんて願わなかった。
ただただ、毎日自由が欲しいと思いながら働いていた。

夢を追いたかった。

趣味に没頭したかった。

同世代の友人たちのように思い切り遊びたかった。

旅行に行きたかった。

不安から解放されたかった。

一度きりの人生が、ただお金のための労働で過ぎ去っていくと思うと、
たまらない気持ちになった。

命が少しずつこぼれ落ちていくような気がした。

ある日ネットサーフィンをしていて、ネットビジネスの存在を知った。

僕にはビジネスの知識なんてカケラもなかった。

パソコンもせいぜいネットサーフィンしかできなかつたし、
人脈もなければ、たいした資金もなかった。
正直うさん臭いとも感じた。

でも、自由になりたいという思いが勝った。

ネットビジネスに取り組み始めて初月で数万円稼げた。
自分の力でお金を稼ぐのはそれが初めての経験だった。

ネットビジネスは本当に稼げると知って、僕は有頂天になった。

バイト代の他に月 20 万円も稼げれば、
借金も少しずつ返せるし、周囲にも面目が立つと思った。
そして何より自由が手に入るかもしれないと思った。

日々のバイトと並行しながら、コツコツとネットビジネスを続けた。

その数カ月後に月収 100 万円を超えた。

僕も家族も呆然としていた。
時給 700 円の皿洗いのもとに、見たことのない大金が転がり込んできた。
ただの偶然だと思ったが、翌月も、その翌月も月収 100 万円を超えた。
夜寝て朝起きると 10 万円くらい利益が発生している日も珍しくなかった。

僕の信じていた世界が崩壊した。

永遠に尽きることはないと思っていた親の借金はすべて返せた。
旅行をしていても毎日何万円も勝手に利益が生まれる状況が出現した。
同世代のサラリーマンが 1 年かけて稼ぐお金が、
たった 1 日で稼げてしまうこともあった。

たった数年でこれほど見事に人生がひっくり返るとは、
自分でも思ってもみなかった。

もともとビジネスにたいした興味があったわけではないし、
ビジネスよりは小説や音楽のほうがよほど好きだから、
ある程度稼げるようになってからは、
以前のように夢中でビジネスをするのはやめた。

1日に仕事に費やす時間は平均1~2時間というところだし、
1週間くらい仕事をしないこともよくある。
(もちろん頑張る時期もあるけども)

そんな生活をしていても収入はのびつづけて、
今やネットから稼ぎだしたお金はゆうに1億円を超える。

ちゃんと放置していても収入が発生する仕組みを作ったからだと思う。

正直今はこの自由な生活が当たり前になってきて、
お金がなかった当時の気持ちを少しずつ忘れつつあるのを感じる。

でもあの頃の葛藤は、僕の人生で絶対に忘れたくないものの一つだ。

だから完全に忘れてしまう前に、
僕が歩んできた道のりを詳しく書き残しておこうと思う。

こんな奴でも成功できるんだと、誰かに勇気を与えられたら嬉しい。

「僕の人生から就職が消えた」

子供の頃、自分は将来会社員か公務員になるのだと確信していた。
それは僕の中で、太陽が東から昇って西へ沈むのと同じくらい自然なことだった。

高校までは比較的真面目な子供だった。
先生たちの全知と徳性を信じていたので、彼らの言う通り、
一生懸命いい子になろうとした。

テストでいい点をとって誉められると純粋に嬉しかった。
学年で3位になったこともあった。
皆の前で誉められると優越感で鼻がむずむず動いた。

ルールには厳格に従った。
服の裾をはみ出させることすら躊躇する中学生だった。

たとえ監視のない場所でも、目には見えないものからの処罰を恐れた。
いつも怒られている不良たちをバカだなあと思っていた。

でも彼らに対する劣等感はいつもあった。
毎日12時には寝て、7時すぎには起きた。
当然モテなかった。

親や教師が大学に行けと言ったから、そうすることにした。
普通に受験勉強をして、普通に進学校に合格した。

その頃テレビゲームやオンラインゲームにハマっていた。
毎日猿のようにゲームをやった。
部活にも入らず、学校が終わると飛んで帰ってパソコンの前に座った。
架空のモンスターを倒してウキョウキョウ喜んでいた。

高校時代は風のように過ぎた。

特別なりたいものなどなかった。

将来は漠然としていた。

しかし「安定」の大切さだけは耳にタコができるほど聞かされていた。

親戚には公務員が多く、警官や消防士や市役所職員や
学校の校長なんかいた。

誰かが公務員になったというと親戚中が祝った。

なるほどどうやら公務員とは勝利であるらしいと悟った。

ゲームのしすぎであまり成績は良くなかった。

貧乏だったので、実家から通える地元の大学に進学した。

就職率がもっともよいという、ただそれだけのことで学部を選んだ。

そこで初めて僕は青春をした。

腹を割って話せる友達ができ、サークル活動にも没頭し、
勉強の楽しさも知ったし、恋人もできた。

ゲームは自然としなくなった。

そして働くということを知った。

いわゆるブラック企業で、お金のために毎日深夜まで単純労働をした。

社員達は働いて、ご飯を食べて、寝るだけの家畜と変わらない日々を送っていた。
愚痴と冗談と猥談を口ずさみながら、
来る日も来る日も朝から晩まで同じ動作をループしていた。

彼らの生活の大部分は狭い店のルーチンワークに消えた。

僕は未来に横たわる約 40 年間の労働を思って心底恐怖した。
終身刑だと思った。

大学に入ってようやく手に入れたものを、根こそぎ奪われる気がした。

大学3回生の後半になると、学生たちの話題は徐々に就職活動一色になった。

エントリーシート…合同企業説明会…リクナビ…面接…SPI…企業研究…

スーツ姿が内定目指して一斉に同じ方向へ雪崩をうつ中、
僕は真っ青になりながら全速力で反対の方角へ逃走した。

就職関連のイベントはことごとく無視した。
好きだった小説で飯を食っていこうと思った。
授業にはあまり出なくなった。

当然、周囲からの就職への圧力は凄まじいものがあった。
親や親戚や友人や彼女や教授たちからみれば、僕は墮落してしまったのだった。

全方位から攻め立てられて、大学4回生の夏、ようやく重い腰をあげた。
リクナビに登録してみたが、もはや誰からも見向きされない、
スーパーの売れ残り食材のような会社しか求人がなかった。

2社受けてみたが、1社目は落ち、2社目は最終面接をボイコットした。

僕は黙々と時給700円の単純労働を繰り返した。
投稿した小説はあっさり一次審査で落ちた。
裁判所から財産差し押さえ通告が来た。

僕の人生は晩年にさしかかっているのではないかと思った。

とにかく金が必要だった。
ネットでたまたま知ったせどりを試してみた。
3ヶ月でバイト先の店長の給料を超えた。
僕は面食らった。

次にアフィリエイトを試してみた。

4ヶ月後に月収100万超えた。

ネットビジネスを始めて1年も経たないうちに、
信じていた世界が根底から崩壊した。

節税のために法人化した頃には、誰も就職しろと言わなくなっていた。

僕の人生から就職が消えた。

スーツとネクタイが消えた。

時計が消えた。

土日が消えた。

祝日が消えた。

通勤が消えた。

時給が消えた。

上司が消えた。

残業が消えた。

秩序が消えた。

無理に大学に通う必要もなくなった。

気付けば色々な義務がなくなっていた。

時間とお金だけが手元にあった。

カレンダーはどこまでも白紙だった。

それまで熱心にたどってきたレールが突然途絶えて、
前後左右どこを見ても茫漠とした地平線が広がっていた。
毎日起きたら「今日は何をしよう」と考えるところからスタートだった。

あるとき観光地の温泉に入った。
平日の昼間は老人しかいなかった。
老人たちにまぎれて独り体を洗った。

脱衣場にテレビがあったので、
風呂上りに扇風機に当たりながらなんとなく見ていた。
経済のニュースだった。
長引く不況に対してサラリーマンたちが怒っていた。

「リストラされた」
「給料が上がらない」
「ボーナスカット」
「小遣いが減った」
「就職率が低下」

僕はそれまでそういうニュースに興味をもっていたはずだった。
しかしそのときは、彼らが何か別の宇宙の話をしているのではないかと疑った。
それらは僕にとってあまりにも無縁な言葉たちだった。

埼玉の友人を訪ねたとき、朝の電車に乗った。
電車はサラリーマンや学生でごった返していた。
会社や学校に向かう人たちの群れを、僕は座ったまま口を開けて眺めていた。
彼らは猛烈な勢いで電車に飲み込まれたり、吐き出されたりしていた。

あれほど嫌悪していたスーツとネクタイに対して、
ほとんど何も感じなくなっていることに気づいた。
地球の反対側の知らない国に住む人たちを見るような目で彼らを見た。

ある日、朝のテレビの占いで「今日も元気に出勤しましょう」と明るく言われたとき、僕は彼らの社会からすっかり弾き出されていることを知った。

これからは一人で生きていかなければならないぞ、と改めて思った。

「月収 200 万円の憂鬱」

こんなことを書くと反感を買うかもしれないが、
月 200 万くらい稼げるようになったばかりの頃、僕は暇で暇でしようがなかった。

2010 年頃の話だ。

その数カ月前までは僕はダイソーで時給 700 円でレジを売っていた。
大学は休学していた。
ネットビジネスを始めて数ヶ月後、それまで忙しく日々を送っていた僕の元に、
突然膨大な時間とお金が手に入った。

365 日、24 時間。

すべての時間が自分の自由になる状況を想像してみたほしい。

まさに永遠の夏休み状態。
こんな小学生の妄想じみた状況が、まさか現実に自分の身に訪れようとは、夢にも思わ
なかった。

勝手に作ったブログやサイトが働いてくれた。
夜寝て朝起きたら 10 万円くらい報酬が発生していることがよくあった。

お金の使い方なんて知らなかった。
それまで牛丼に卵をのせることをためらうほど貧乏だった。
田舎だしテレビも見ないので、物質的欲望が刺激されることも少なかった。

とりあえず欲しかった本をまとめ買いしてみた。
興味のあった楽器も買ってみた。
親の借金もヤバそうなところから返した。

そうしている間もずっとふわふわした浮遊感があった。
ある意味放心状態とも言えるかもしれない。

寝ただけたっぷり寝て、
カフェで読みたかった本を読んで、
楽器を指が痛くなるまで練習して、
飽きるまでネットサーフィンをしても、まだ一日が終わらなかった。

正直時間を持て余した。

それまでの僕のモチベーションと言えば、
労働やお金に束縛された人生から解放されたいという強烈な欲求だった。

好きなときに、好きな人と、好きなことをする自由を手に入れたい。
一度きりの自分の人生を、思い切り自分のために使いたい。

そうした人生をかけた目標を、ほとんど瞬間的ともいえるほど
短い時間の間に叶えてしまった僕は、一時的に漂流してしまった。

それ以上お金を稼いでも使い道なんて想像できなかったから、
1日1時間程度のメンテナンス作業以外、ほとんど何もしなくなった。

自由になったといっても、友人達は自由じゃなかったし、
4年つきあった彼女にも振られていたから、必然的に僕は多くの時間を一人で過ごした。
田舎だから起業家のコミュニティのようなものもなかった。

家の近くに温泉街があった。
平日の昼間は老人ばかりだった。
人生の勤めを終えて、弛緩しきった老人達の皮膚を眺めながら、
来る日も来る日も呆然と湯に浸かった。

適当に旅行もしてみた。
混雑する連休を避け、平日に行動した。
どの観光地に行っても老人だらけだった。

彼らはいつも緩慢に歩きながら、
顔をしわくちゃにして笑ったり喋ったり怒ったりしていた。

俺の世界は老人ばかりになってしまったぞと思った。
自分の体までしわしわになっていく気がした。

「起業に興味のない起業家」

ネットビジネスが軌道に乗り始めた頃、法人化の必要に迫られていることに気づいた。個人のままやっていると税金が大変なことになることに気づいたからだ。

『起業』

これは僕にとって全くなじみのない言葉だった。

僕は自由になりたかっただけで、別にビジネスをやりたいわけでもなかった。経営者という人種の哲学や人生に興味を持ったこともなかった。ビジネス書も経済新聞も読まなかった。起業家と宇宙人は僕の中でほぼ同義だった。

自分で事業を興せるような人間は、とてつもなく優秀で、自分とは全く異なる脳構造や精神構造をもっているのだと思っていた。

本やネットで一生懸命調べて、とりあえず法務局とやらにいけばいいのだと知った。25万円ほど払えば誰でも社長になれるらしかった。僕は法務局なんてものがあることすら知らなかった。

とりあえず書類を揃えた。
はんこも一番安いやつを買った。
会社名は迷った。
会社なんてどうでもよかったし、節税のために便宜上作るものだったから、何の思い入れもなかった。

英語辞書をぱらぱらとめくってみたら、なんとなくそれっぽい単語が目に入ったので、深く考えずにそれを会社名にした。
代表取締役というところに自分の名前を書いて提出した。

その瞬間、社長とかいう人種に僕はなった。
学生時代、あれほど僕が忌み嫌い、憎悪していた会社という組織のトップになった。

資本論やプロレタリア文学を読みあさり、
蟹工船のエッセーコンテストで受賞したこともある僕が、
立派に資本主義の尖兵になった。

僕は思わず笑ってしまった。

今も社長と呼ばれると若干の居心地の悪さを感じる。

起業を志す学生に教えを請われることもある。
彼らの熱い思いに耳を傾けていると、
こんなニセモノが起業家なんかになってしまい申し訳ないとも思う。

正直僕は国家も社会も経済も興味がない。
よくテレビに出てくる経営者達がもつような使命感もない。
地位や名声を得たいという欲望もない。

僕と僕に関わる人間が幸せになればそれでいいと思っている。
一生自由にやりたいことだけやって暮らせればいいと思っている。
そのためにはお金が必要だから、効率のいい方法を選んでいるだけだ。

税金は収めるし、ルールは守るが、それ以上のことは考えていない。
国や社会に1億渡すくらいなら父ちゃんと母ちゃんに1億渡したほうが
100倍ましだと思っている。

だから野心をぎらぎらさせた起業家や、国家社会のために心血を注ぐ起業家をみると、
正直威圧される。
人前では大人しくしていようと思う。

会う人によく「オーラがない」なんて言われるのはそのせいかもしれない。

「燃え上がる家、没落の父」

朝鮮戦争の頃に父は生まれた。

中学を卒業したらそのまま職業訓練校に行き、襖や障子などを作る建具の技術を身につけた。その後、職人の元に弟子入りして修行し、20代前半で独立した。

折よくバブルがやってきた。電話帳に数万円で広告を出せばそれだけで注文が殺到した。近所の田畑や空き地が狭まり、雨後の筍のように新築の家が建った。父にはロコミを呼ぶだけの技術もあった。

金を手にした父は王者のごとくだった。月に100万稼ぐ月も珍しくなかった。幼い姉や兄を実家に任せて、父は朝から晩まで母とともに猛烈に働いた。

家庭内では専制を敷いた。学のない父の直感と経験と気分によってすべての物事が決められた。口答えをする者がいれば平手を食らわし、言いつけを守らない者がいれば物を壊した。

母はただ父に服従するのみだったが、読書家で理性的な姉は成長するとよく父と衝突した。言い争いになれば常に姉が勝った。

しかし父には武力があった。道理で敵わぬと知るや、すぐさま拳や物が飛んだ。「誰が飯を食わしとる」とよく言った。熟れた柿を顔にぶつけられて泣く姉の姿を今も覚えている。

父は車を買った。当時高かった巨大なテレビを買った。

20代にして家を建てた。

さらに数年後、数百万かけて家を増築した。

僕と兄をプロ野球選手にしようという野望があるらしかった。

破竹の快進撃はそこで終わった。

バブルの終焉に伴い、新築の仕事が劇的に減った。

中国や東南アジアで大量生産された、圧倒的に安い輸入商品が攻め寄せてきた。

家を建てる世代の若者達が洋風建築に憧れるようになった。

襖や障子を作り、電話帳に広告を出すことしか知らない父は、

急速な世界の変化に戸惑うのみだった。

自分の制作物よりはるかに質の低い商品が売れていく実情に憤慨した。

「見る目がない」と人々のことをののしった。

過疎化と高齢化で、お得意様は減るばかりだった。

僕と兄は野球をやめ、父の野望は断たれた。

父は初めて暇をもてあました。

がむしゃらに働いて金を稼いできた人生だった。

友人は少なく、空いた時間を何で埋めれば良いのか分からなかった。

精神の拠り所を、数少ない趣味だったパチンコに求めた。

毎日朝から晩までパチンコをした。

刹那的な感情で行動する父だから、負けるときは平気で5万や10万負けた。

そのぶん勝つ金額も大きかった。

最初は嫌悪を示していた母も、父の熱心な勧誘によって見事にパチンコに狂った。

夫婦揃ってパチンコの開店時間に並んだ。

勝った日は平和だったが、負けた日は食卓に必ず嵐が吹いた。

負けると取り返そうとしてますます意固地になった。

夫婦が10年以上働いて貯めた財産は瞬く間に溶けた。

生活に困窮するようになり、消費者金融に手を出したが最後、

借金は彼らの予想を上回るスピードで増えた。

僕が家の窮状を知ったのは高校を卒業した頃だった。
末っ子の僕に借金の存在は秘匿されていた。

それでも分別のつく年頃になってから、なお数年の間、
何も知らずに安穏と暮らしてきたのは愚かと言うほかない。
僕はひたすらゲームに夢中だった。

貧困の予兆はあった。

父の働く日は極端に少なくなっていた。
パチンコで負けて喧嘩をしている日の方が多かった。
金を無心された姉がよく憤慨していた。
督促の電話や手紙を受け取ることがあった。

それでも大学には行かせてもらえた。
奨学金と学生ローンは全額借金の返済に充てた。

バイトで稼いだ給料の一部を家に納め、俺も家に貢献しているぞと得意になったが、
それは借金の利息にも満たなかった。

父は消費者金融の借金を、別の消費者金融から借りた金で返していた。
その消費者金融の返済期限が迫れば、また別のところから借りた。
いわゆる多重債務者だった。
親戚からはいよいよ借りれなくなった。

往年の覇気は見る影もなく、父の背中のみるみる萎んだ。
電気やガスが頻繁に止まった。
父は姉からますます苛烈に金を取り立て、僕には逆に猫なで声で金をせびった。
長男の兄は火の手から逃げ出すようにして別の土地へ移った。

ある日 5 万円貸してほしいと母に頼まれた。
それまでにも散々貸していた。
貸すといっても返ってくることはまずなかったし、
田舎の安い時給で 5 万円は大金だったから、僕は拒否した。

すると「家がなくなる」と言って母は泣いた。
これ以上滞納すれば差し押さえは免れないらしかった。

僕としても全人生を過ごした家を失うことは悪夢だったから、
断腸の思いで口座から 5 万おろして渡した。
翌日、父がその金をすべてパチンコで失ってきた。
詰問する僕に、父はどす黒い顔をして反駁した。

「増やさにゃ生きていかれん」

督促を恐れて、父も母も電話に出られなくなった。
家族団らんの最中に電話が鳴り出すと、全員が息を詰めてコールが終わるのを待った。
やがて父は電話の線を抜いてしまった。
当然仕事の注文もこなくなった。

どこかに雇ってもらってはどうかと勧められても、父は一切耳を貸さなかった。
建具の技術は学のない父が唯一他人に誇れるものだった。
一時代を築いたという自負もあった。
これを捨て去ることはすなわち彼の人生の否定だった。

それに父は 50 歳を超えていた。
世間の常識を知らなければ、敬語の使い方も知らなかった。
その父がまともに職にありつけるとは、彼のみならず家族すらも到底想像できなかった。

代わりに母が親戚の水産工場でパートを始め、数日後に転んで他愛もなく骨折した。
それ以来足を悪くし、立ち仕事ができなくなった。

財産差し押さえ通告がきたとき、僕と父は笑い、母だけがため息をついた。
みかねた親戚が助け舟を出してくれたが、破局を少し先延ばししたにすぎなかった。

便所の汲み取り代が払えず、便所が汚物であふれた。
もはや消費者金融さえも金を貸してくれなかった。

自己破産してはどうかと言ったら、
「恥ずかしくて外を歩けなくなる」
「ご先祖様に申し訳が立たん」と言われた。

そもそも自己破産する金もなかった。

両親には法の知識も、金を稼ぐ知識もなかった。
それらの知識が必要だということすら知らなかった。
ギャンブルと宝くじだけが彼らを借金から救いうる唯一の方法だった。
金がないので、来る日も来る日も1円パチンコをしていた。

犯罪だけはせずにはいた。

「麗しき労働の日々」

僕が泡を噴きながらネットビジネスの世界へ逃げ込んだのは、
第一に家庭の貧困、第二に労働への恐れからだ。だ。
どちらの比重が大きいかと問われれば、まぎれもなく後者だと答える。

僕が経験した最初の労働は 18 歳のときだ。

どうにか大学には入学したものの、
パチンコに狂い多重債務者となった両親からの援助など期待できるはずもなく、
自分で働いて金を稼ぐ他に道はなかった。

さっそく家の近くのカラオケ屋兼ゲームセンターでアルバイトをした。

時給 650 円という、法定最低賃金ぎりぎりの、
今思えば涙の出でてくるような時給だったが、
それでも 1 日 8 時間働けば 5000 円くらいにはなった。

当時の僕からすれば 5000 円は大金だったし(ゲーム 1 本買える!)、
月末には 5 万以上の給料が振り込まれた。

そのような途方もない金を一度に手にする機会は、
それまで正月のお年玉くらいしかなかった。

僕は初めて体感する労働というものの威力に少なからず驚嘆し、興奮を覚えた。
肉体一つあれば金を稼ぐことなど簡単なことだぞと思った。

職場の環境もまた素晴らしく良かった。
僕が胸をときめかせながら初出勤すると、
さっそく先輩に大量のポテトとコーラを振る舞われた。
もちろん誰も金を払っていない。
アルバイトたちは無断で飲み食いしているのだ。

僕はアルバイト経験などなかったの、そういうものなのかと納得し、働くとはなんて素晴らしいことなのだろうと嬉しかった。

店にはとにかく客がいなかった。

一世代前の機器。

すぐにハウリングを起こすマイク。

色あせた壁と綿がはみでたぼろぼろの椅子。

音質の悪いスピーカー。

まずいと客から苦情が来るほどまずい料理。

5回客を案内すれば1回はクレームがくるほどひどいカラオケ店だった。

それでいて料金は他の店と同じくらいとるのだから、客などくるはずがなかった。

店長は別の店と兼任していて、滅多にカラオケには顔を出さなかった。

ある先輩は勤務時間中ずっとノートパソコンでエロゲーをしていたし、

他の先輩は大量に漫画を持ち込んで読み漁っていたし、

DS や PSP が発売されてからはそれが流行った。

とにかくすることがない。

朝に30分ほど掃除をしたら、あとは客がくるまで呆然としていなければならない。

たとえ客が来たところで、部屋に案内したらオーダーでもこない限りもう仕事はない。

僕はひたすら小説や漫画を読んだ。

僕の仕事はむしろ読書といってもいいくらいだった。

読書に飽きたら目的もなく店中をうろうろした。

暇なので先輩とピザをつくり、

その上から揚げやフライドポテトを山盛りにして喜んでいたら、

たまたまやってきた店長に見つかって冷や汗を掻いたこともあった。

交代の時間以外は、勤務は基本的にアルバイト一人だ。

僕が勤務時間外に店に遊びにいくと、
先輩がレジの前に突っ伏して軒をかいていることがあった。
別の先輩はよく近所の本屋までジャンプを買いに行った。
その間店はおもむけの殻だ。
さすがに僕にはそこまでの勇気はなかった。

営業時間は深夜の1時までだが、12時半になって客がいなければさっさと店を閉めた。
それから部屋にこもって思う存分歌った。
時には先輩たちが遊びに来て、閉店後一緒に歌ったりもした。
おかげでずいぶん歌がうまくなった。

1日の売上がトータルで420円だったこともあった。
閉店間際、先輩アルバイトがさすがに情けなくなって、
420円のピザを一枚買って帰ったのだ。
朝10時から深夜1時まで来客数ゼロは後々までの語り草になった。

僕はこの仕事を気に入っていた。
椅子に座って本を読んでいるだけで金がもらえるだから、文句などあるはずがなかった。
働くことは良いことだった。

唯一の不満と言えば、夕方になると近所に住む不良たちが
しばしば大挙して押し寄せてきて、ゲームコーナーを占拠してしまうことだった。

学生服を着た中学生たちが、啜え煙草をしながら、
見事な貫禄で深夜までスロットをうった。
気に入らないことがあるとすぐに機械を殴り、
店員の姿が見えなくなれば景品を盗もうとした。

不良どもの横暴に堪え兼ねた先輩が、
ある日椅子を振り回して彼らの一人を店から追い払ったところ、
翌日に全身入れ墨をした上半身裸のチンピラが中学生の不良どもを引き連れて
怒鳴り込んできた。

中学生達の前で先輩は土下座させられ、
僕はその横で滅多にない量のオーダーをこなすために一人で走り回った。
土下座する先輩を見て警察を呼ぶべきかとも思ったが、報復を恐れた先輩に止められた。

不良達の横暴はその後リーダー格の中学生が傷害で少年院に送られるまで続いた。
知らせを聞いた僕らは意気揚々と祝杯をあげ、再び安逸の日々を取り戻した。

僕が働き始めて1年ほどたったある日、突如として店は潰れてしまった。
楽しい労働の日々はそこで終わった。

途方に暮れた僕は次にファミレスのキッチンでアルバイトを始めた。

この職場は言語を絶した。
ここでの労働経験が、その後の僕の人生を思い切りねじ曲げてしまった。

「地獄のような労働との遭遇」

カラオケ屋がつぶれた後、大学近くのファミレスでアルバイトをすることになった。

シミひとつない純白のコック服に身を包み、
胸をときめかせながら初出勤した僕を出迎えたのは、
巨大なシンクを埋め尽くす汚れた皿の山だった。

皿洗いがこれほど憂鬱な仕事だということを僕は知らなかった。

ひたすら食器を擦ってこびりついた汚れを落とし、
洗浄機に放り込んでいくだけの仕事だが、
その過酷さは工事現場の土方にも劣らなかった。

茶碗にこびりついた米粒や鉄板の焦げ付きは、
タワシで渾身の力をこめて擦らないと落ちない。

常に前かがみの姿勢なので腰に疲労が溜まる。

ホールの店員は次々と汚れた皿を客席から持ち帰ってきて
ステンレス台の上に無遠慮に積み上げていく。

ピークタイムには洗浄機の動作が食器の積まれるスピードに追いつかず、
僕が持てる限りの力と汗を振り絞って皿や鉄板を磨いても、
食器の山は減るどころか逆にさらなる高みを目指してむくむくと隆起していく。

スピードを上げろと怒鳴られたってどうなるものでもない。

熱湯を噴き出す洗浄機からはもうもうたる湯気が押し寄せてくるため、
夏の洗い場はほとんどサウナと変わらない。

厚手のコック服は通気性などないに等しい。

飛び散る湯と交る汗で、5分と待たずに濡れ鼠になるので、
こまめに水分補給しないとすぐに脱水症状になる。

カラオケ屋のぬるま湯のような環境で骨の髄までふやけていた僕は、
予想していたものと全く違う、この地獄のような労働との遭遇に震撼した。

みんなで和気あいあいとおいしいものを作り、
たまにつまみ食いでもしていれば金がもらえるはずではなかったか？
労働とは確かそういうものではなかったか？

あのカラオケ屋を燦然ときらめかせていた同僚たち――

客の目を盗んで惰眠をむさぼり、
勤務中にゲームと漫画に我を忘れて没頭し、
笑いながら軽々と不正をこなし、
店をからっぽにしてジャンプを買いに出かけ、
客がいなければ勝手に閉店し、
ときには不良どもに椅子を振り上げて襲いかかる、
あの愉快的な同僚たちは一人もいなかった。

皆顔中を汗まみれにしながら、ビデオの早送りのように同じ動作を繰り返していた。
あまりの忙しさに、同僚たちはいつも眉間に皺を刻んでいた。
ピーク時には罵声と怒号が飛んだ。

お盆やゴールデンウィーク、年末年始などのかきいれ時には、
1日の労働時間は12時間を超えた。
休憩は昼と夕方に30分ずつ。
あとはひたすら汗だくになって前かがみの姿勢で狂ったように皿を洗った。

最初は色々なことを考えた。

これが本物の労働なのか？
僕は皿を洗うために生まれてきたのか？

こんな労働は本当に人間がやるべきものなのか？
これはいわゆる搾取というものではないのか？
同僚たちは何も感じないのか？

しかし2時間も3時間も皿を洗い続けると、
暑さと疲労で朦朧としてきて、徐々に何も考えられなくなった。

時間の感覚も失われた。
皿と湯と洗浄機だけが世界のすべてになった。
皿洗いが10時間を超える頃には、僕は思考も感動も停止して、
ただ無表情に皿を洗う機械の一部と化した。

洗うべき食器が一時的になくなることもあった。
僕の手が少しでも空いたと見るや、店長や先輩はありとあらゆる雑務を僕に振った。

「キャベツとニンジンの処理よろしく」
「ステーキソース作っというて」
「ジャガイモのスライスもお願い」
「サーロインとヒレを十枚ずつ解凍しというて」
「味噌汁サプライ」
「次のライス炊いとけよ。間に合わなかったら目も当てられねえぞ」

経験の浅い僕の処理能力はたちまちパンクして、
野菜くずの散らばる床の上を錯乱状態で走りまわった。

冷蔵庫の中身を混ぜ返し、暴力的に器具を洗い、野菜や肉に包丁を叩きつけた。

指も切ったし火傷もした。
洗剤がはねて野菜にかかっても知ったことではなかった。
そうこうしているうちに洗い場はまたしても汚れた食器であふれかえった。

仕事はどう考えても僕の手には余ったが、
本当にスピードを求められるときは先輩が応援に来た。

可愛いなと思っていた先輩の女の子に、
「ちんたらやってんじゃねえ！」
と吐き捨てられた時は、奈落の底に落ちる気分だった。

しかし彼女の包丁捌きには舌を巻いた。
目にもとまらぬ早さと機械のような精密さでジャガイモやタマネギを刻んだ。

皮や葉の部分はまな板に向かったまま後ろ手で投げ捨てたが、
力の加減を完璧に把握しているのか、
それらはことごとく背後の離れた場所に設置してある屑籠の中に正確に吸い込まれた。

あれほどの熟練を得るためにはどれほどの膨大な時間を
この憂鬱な労働に捧げなければならないのだろうと僕は恐れた。

当然落伍者も多かった。

新人の半分は最初の皿洗いで腰を抜かして辞めた。
おかげで僕はなかなか皿洗いから抜け出せなかった。

僕自身辞めることを考えないでもなかったが、
それまでアルバイトを自ら辞めるという経験をしたことがなかった僕には、
世話になっている店長に辞意を伝えるというのはなかなか勇気のいることだった。
まごついているうちに時間が過ぎた。

200℃の油を全身に浴びたり、割れた食器の破片が目飛び込んだりして、
病院送りになる同僚も多かった。
強い洗剤で手は砂壁のように荒れ、ところどころひび割れた。
帰るのはいつも午前2時か3時だった。
金を稼がねばならないのと、人手不足が深刻なので、休みはほとんどとれなかった。

僕はノイローゼになりかけていた。
夜布団に入って目をつむると、遠くから皿のぶつかりあう
カチャカチャという音が聞こえてきた。

ラジオのボリュームのツマミをゆっくり回すように、それは徐々に苛烈な騒音に変わって脳内に反響した。シンクを埋め尽くす皿の映像がまぶたの裏を流れた。布団の上を転々としてみても、目をこすってみても、耳をふさいでみても、効果のある相手ではなかった。

なかなか寝付けない日々が続いた。
翌日バイトがある日はいつも胸がつぶれそうだった。

徐々に午前中の講義に出られなくなっていった。
単位をいくつも落とし、ついに留年が決まった。
家族や親戚が喚き、店長や他のバイトは笑った。

ある日ついに出勤するのをやめた。
時間になっても布団から起き上がることができず、ぼんやり目を開けたまま、壁掛け時計の針が進むのを眺めていた。

出勤時刻を過ぎてもそのままだった。
店長から電話がかかってきたが、それに出る勇気もなかった。
そのまま二度とファミレスには顔を出さなかった。

後には落後者特有の恥ずかしさと、労働に対する憎悪だけが残った。

「労働、この恐るべきもの」

労働とは恐るべきもの――

徐々にそんな確信が僕の中で育っていった。
思い起こせば、いくつもバイトを経験する中で、
僕がこうありたいと憧れるような労働者は一人もいなかった気がする。

僕の生まれて初めての店長は、ちょこまかと動く背の低い眼鏡のおじさんだった。
几帳面な性格で、業務に一切手抜きはしなかった。
働くということを知ったばかりの使い物にならない僕に、手取り足取り教えてくれた。

店のオーナーは白髪で、大きな耳とシワだらけの顔が猿そっくりだったので、
猿じいと陰で呼ばれていた。

猿じいの仕事は日々の売上を銀行に入金することくらいだった。
一応毎日店に顔を出したが、ほとんどの時間は楽器を弾いたり、
店をウロウロしたり、店にやってくる子供たちと長話をしたりしていた。
店は猿じいが道楽でやっているようなものだった。

この猿じいに店長は目の敵にされていた。
カラオケ屋の売上は時に1人も客がこないほど悲惨だった。
その原因はバイトの目から見ても明らかだった。

カラオケの機械は一世代どころか二世代も前のもので、マイクはすぐハウリングし、
椅子や壁はボロボロだった。
それでいて料金が安いわけでもなかった。
だれがわざわざこんな店を使うのかと、バイト達ですら首を傾げた。

しかし猿じいの曇った目には、売上が少ない原因は
もっぱら店長の無能もしくは怠惰によるものと映った。

猿じいの説教は長くて有名だった。

ときには二時間以上説教し続けることもあった。

(30分ほど説教したかと思うと、またもとの話題にループしたりした)

店長はいつもうなだれて説教を聞いていた。

客が来ないので説教が中断されることもなかった。

店長が新しい機材を導入したいと言っても、

「そんなことは売上を増やしてから言え」と一蹴された。

売上が悪い見せしめに、店長は平社員とまったく同じ給与だった。

バイト達の前でも猿じいは平気で店長の悪口を言った。

店は中学生の不良たちにたびたび占拠された。

店長は彼らを追い払いたがっていたが、

肝心の猿じいが近所でくだを巻いている不良たちを店に呼び込んで、

菓子やジュースを配ったりするので、手が付けられなかった。

一度店長が煙草を吸っていた中学生を注意したら、

「余計なことをするな」と猿じいに怒鳴りつけられていた。

中学生達はつけあがり、その後も堂々と店長の前でくわえ煙草をした。

バイト達はやる気のかけらもなかった。

店長が目を離すとすぐにゲームや漫画に没頭し、まるで呼吸をするように不正をした。

注文されていない食材がみるみる減った。

恐らく店長は勘づいていたが、あえて問題にすることもなかった。

バイトをクビにすればあいた穴は自分で埋めなければならないし、

管理不行き届きということでまた猿じいにコテンパンにされるに決まっていた。

何よりもモチベーションがなかったのだろう。

よく業務の最中に「辞めたい」「帰りたい」と呟いていた。

そういう時の店長は決まって無表情だった。

店が潰れる数ヶ月前にようやく店長は辞めた。
退職の挨拶の時、彼は僕たちアルバイトに、これまでで最高の笑顔を見せた。

伯父の水産工場で短期バイトをした。

木枯らしの吹く季節だった。
伯父の車で初めて工場に出勤し、休憩室で他のパート達が出勤するのを待つと、
ジャンパーに長靴姿の初老の男女が三々五々集まってきた。

薄暗い部屋の中、石油ストーブを囲んで彼らは談笑した。
もっぱら病気と、介護と、ギャンブルの話題だった。
伯父の両隣に 50～60 代くらいのが女性が座り、
「両手に花じゃの」とからかわれて伯父は照れていた。

彼らの体からは魚の匂いがした。

僕の仕事は凍った魚の餌をカッターナイフで開けていくことだった。
吹き付ける海風が冷たくて、しきりに鼻水を啜った。
分厚い手袋をしていたが、すぐに痺れて手指の感覚がなくなった。
重い箱をもって、何度もマイナス 30 度の冷凍庫に出入りした。

水揚げされたばかりのサンマの入ったコンテナが大量に運ばれてきた。
魚の詰まったコンテナは光に反射してまるで宝石箱だった。
僕は帽子を被った初老男性とペアを組んで、
コンテナからサンマ以外の魚を弾く仕事をした。
ときどき混ざっているアジやライカやらを床に無造作に捨てていった。
ずっとかがんでいるので、一時間もすると腰が痛くなった。

僕とペア組んでいる初老男性が仕事の手を止め、
そそくさとポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつけて一服した。

その瞬間、伯父の怒声が響き渡った。

「ワレ、なにしとる」

長靴を鳴らしながら鬼のような形相をした伯父が駈けてきて、
僕の目の前で煙草を吸った男性の尻を凄まじい勢いで蹴り上げた。
小柄な男性の体が一瞬浮き上がるほどだった。
男性は尻をおさえて、不明瞭な言葉で弁解した。
伯父はげんこつを握ってさらに威嚇した。

伯父が持ち場に戻った後、男性は作業をしながら、
小さな声でずっと伯父の悪態をついていた。
僕はすっかり意気阻喪して水産工場で働くのをやめた。

ファミレスでバイトをした。

ここの社員たちは僕が見てきたなかでももっとも長大な労働時間を誇った。
何もない平日でさえ 12 時間労働を超えることは珍しくなかった。

ゴールデンウィークや年末年始などの忙しい時期には、労働時間は 15～17 時間に達した。

(朝 9 時から深夜 2 時まで)

もちろんほぼすべてサービス残業だった。

休みは月に 2-3 回で、バイトが突然休んだり辞めたりすれば、その休みすらも失われた。
休憩時間はほとんど店の休憩室にこもって食事をするか、愚痴や冗談を言うか、
うたた寝するかしていた。

そして休憩終了時刻のきっかり 5 分前になると、
いそいそと代わり映えのしないルーチンワークに戻っていった。

この人たちは何が楽しくて生きているんだろう…と僕は真剣に悩んだ。

テレビも見ない、映画も見ない、小説も雑誌も漫画も読まない、
社会の動きや世界の問題にも興味がない、芸術やスポーツを嗜むこともない、
知識の獲得や心身の鍛錬に熱心なわけでもない、友人や家族との触れ合いもない…

同じような仕事をし、賄い飯を食べ、家に帰って眠るだけの農家の家畜のような日々。
刑務所の囚人や黒人奴隷でももっと人生の楽しみがあるのではないかと思わせた。

一度、チーフが売上のことで常務だか専務だかに扇子で引叩かれていた。
仕事をしていたバイトたちが一斉に振り返るほど大きな音がした。
店長は顔中に汗を浮かべながら太った上司に頭を下げている。

それを見て僕は、会社員とはもはや人間ではないのだなと思った。
会社という巨大な組織を回すために使い潰される牛馬か部品だった。
チーフは何事もなかったかのようにその日も深夜まで残業をした。

チーフは休憩中、頬杖をついてよく窓の外を見ていた。
窓からは道路が見え、行き交う車が見え、家々が見え、青い山脈と白い雲が見えた。
世界はこんなにも広いのに、店長の一度きりの人生、そのもっとも輝かしい時期は、
ほとんどこの狭いファミレスの中で過ぎ去ってしまうのだと思った。

僕の中に人間をやめたくないという強烈な思いが湧き起こってきた。

最後のバイト先は某ショップのレジうちだった。

この社員はだいたい12時間労働が相場というところだった。

店長というものはえてして売上の奴隷だが、この店長もご多分に漏れなかった。
毎日の売上に一喜一憂し、二言目には売上、売上と呟き、
棚の位置をひとつずらすのでさえ何日も悩んだ。

ちょっとガラの悪い高校生が集団で来たりすると、
「おい、万引きっ、万引き気をつけろよ」と僕に耳打ちして、
自分も彼らのそばで商品を整理するふりをしながら監視を始めた。

極端に客が少ない日には売上を増やすために、
自分でカゴいっぱいポテチやら飴やらジュースやらを買って帰った。
(僕はそれを見てドン引きした)
そんな日は月に何回もあった。

客が怒ればたとえ非がなくても下僕のように平身低頭謝り、
本社から役員が来る時は戦々恐々として、
額に汗を浮かべながら視察に来た上司におもねっていた。

朝は開店の一時間も前から出勤して事務をし、
開店の時間になってからようやく出勤のタイムカードを押した。

運動会前日と言うことで、行楽用品がよく売れる日があった。
店長にも小学生の子供がいることを知っていたので、
「運動会、見に行かないんですか」と僕が訊くと、
「土日は休めないよ」と店長は当たり前のように答えた。

子供の運動会すら見ることでできない人生があるということを僕は知った。
それを常識のように語る人がいるということも。

店長は昔は映画監督になりたいという夢があったらしいが、
今は帰宅後にビールを飲むのが何よりの楽しみらしかった。

僕は就職活動をまったくしなくなった。
心底恐怖に震えていた。
なぜこんなシステムがまかりとおっているのか、ワケを知りたかった。

就職とは自殺と同義だと思った。

「システムの隅っこにあいた風穴」

時給 700 円のレジ打ちの日々を送っていたある日、
店長が僕に、将来総合的なリサイクルショップを開いてみたいというような話をした。
閉店間際のヒマな時間帯だった。

むろん店長にはそんな金も時間もできる見込みはなかったのも、
明確な意志としてではなく、漠然とした夢物語として語ったのだと思う。

僕が本好きだということは店長も知っていたので、
「君は書籍の仕入担当をやらないか？」と言われた。

僕にとって就職とは死ぬことだったが、
書籍を仕入れるという行為は純粋に面白そうだなと思った。

「そもそも古本というものはどこから仕入れるのだろう？」

疑問が浮かび、帰宅してからネットで調べてみた。
そこで僕は [「せどり」](#) という言葉と初めて遭遇した。
このたった 3 文字の言葉が僕の人生を変えた。

ブックオフに足を運び、棚にある商品のネット上の相場を携帯ツールで調べ、
利益が出そうなものだけ買って帰って転売する…。

ビジネス経験などまったくなくても、これくらいならできるんじゃないかと感じた。
せどりで生活している人のブログをいくつか読んだが、
みんな簡単そうにお金を稼いでいた。

初期資金は数万円くらいならどうにか用意できた。
さっそくある日のバイト帰り、職場の近くにあったブックオフに立ち寄ってみた。
田舎の小さな店舗だが、棚には色とりどりの本がぎっしり詰まっていた。

期待は膨らんでいたが、疑う心もあった。

うまい話には裏がある…そんな警告をこれまで生きてきた中で何度となく聞かされていた。

店員や他の客の視線を気にしながら、携帯に書籍の ISBN 番号を指で打ち込んでいった。表示される相場は「1 円」が多かった。当たり前だが、何でもかんでも利益が出るわけではなかった。

が、10 冊ほど調べたとき、突然、Amazon 価格 1000 円を超える数字が携帯に表示された。

僕は何度も本のタイトルと価格を見返したと思う。時間にして 5 分も経っていなかった。Amazon 価格 1000 円超えのそれは、確かに目の前の 105 円コーナーに挟まっていた。

胸が少し高鳴った。

1000 円というお金を稼ぐために、僕は一時間以上もレジの前に突っ立って、赤の他人達に頭を下げなければならなかった。あるいは皿洗いなら、軽く数百枚の皿を汗だくになりながら洗わなければならなかった。それだけのお金が、目の前の棚に無造作に挟まっている…

それから 1 時間ほどの間に 500 円～1000 円くらい利益が出る本をさらに数冊見つけた。それらをすべてレジに持っていくと、僕と同じく時給 700 円や 800 円で働いているであろうアルバイトが、笑顔で黒い袋に詰めてくれた。

売れるかどうか確信はなかったが、損をしても数百円なので気は楽だった。帰宅してすぐに Amazon のアカウントを開設し、買ったばかりの本を出品した。見慣れた Amazon のサイトに自分の本が並んだ。

翌日は普通にバイトをした。

8時間みっちりレジ打ちをした後、休憩室の椅子に座って携帯を開くと、見慣れないメールが Amazon から届いていた。

105 円で仕入れた本が、1500 円ほどで売れていた。

僕はすぐに立ち上がってその場をウロウロしはじめた。
それは僕の 2 時間分の労働の対価とほぼ同じだった。

売れた本をお客さんに発送しなければ、と思いたった。
幸い僕の職場は 100 円ショップだったので、
その場で封筒やテープなどの資材を買って帰った。

ホームページを参考にしながら、慣れない手つきで買ったばかりの本を梱包し、
クロネコヤマトからお客さんの住所に発送した。
それでおわりだった。

ブックオフから Amazon、そしてお客さんのもとへと、
本を移動させただけでお金が生まれた。

その日から足繁くブックオフに通った。
毎日バイトが終わると、2~3 時間ブックオフで利益の出る本を探した。
ときには 20 冊以上仕入れられる日もあった。

3000 円くらい利益が出る本が売れたときは有頂天だった。

3000 円あれば学食で朝昼晩好きなものが食べられた。
牛丼屋やラーメン屋でトッピングだってできた。
欲しかった CD や本を新品で買えた。
友達とカラオケに行けた。
映画だって 2 回も見れた。

バイト帰りにブックオフに立ち寄るだけで、
そのような大規模な生活の転換をもたらすお金が稼げるということ…

これは僕の信じてきた価値観を根底から揺るがす事態だった。
お金とは誰かに雇われないと得られないものだと思っていた。

僕は古本屋を始めたのだと思い、さらに熱中してせどりをした。
色々と効率的な方法というものも研究した。

すると大変なことが起きた。

せどりからの収入が、バイトの給料を上回り始めたのだ。

丸1日立ちっぱなしで働いて、勤務終了後にくたくたになって椅子に座り込み、
携帯を開いてみたら、よくバイトの給料を圧倒的に上回る
1万や2万の利益が発生していた。

嬉しいを乗り越えて呆然とした。

世の中に常識としてまかり通っている価値観に対して様々な疑惑が生まれた。

働くとは何か？

お金とは何か？

なぜこんなに必死に働いて5000円や6000円しか稼げず、
片手間のせどりで1万も2万も稼げるのか？

バイトの給料と合わせると、同世代のサラリーマンの収入を軽く超えていた。

店長に注意を受けたり、仕事を教えてもらったりしているとき、
ふと、俺の収入はこの人より多いのだな、とビックリすることがあった。

10年近く仕事に従事し、趣味や夢を捨て、
会社に人生の大部分を捧げてきた人の収入を、ただの学生が3ヶ月ほどで超えた。

…もしかして本当に雇われなくても生きていけるのか？

足元がぐらぐらと揺らぐようだった

完全無欠と思われたシステムの片隅に、ぽっかりと風穴が空いているのを僕は見つけた。

(つづく)

感想などはこちらからどうぞ。

<https://ssl.formman.com/form/pc/qHGUN5BgP4hVNunC/>

だいぼん

ブログ: <http://daipon01.com/>

メール講座: <http://infospeed.org/22merumaga/>